

---

# 呪いの解き方

蓮

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

呪いの解き方

### 【Nコード】

N0523W

### 【作者名】

蓮

### 【あらすじ】

西英長編。告白したアーサーと、そんなアーサーを振ったアントーニョ。しかし周りの者たちの協力によりアントーニョは。途中ロマ英的展開が入ります。くるん兄弟と悪友+米が出しゃばりまくる長編。日も時々出しゃばる。pixivやブログにて同じものをアップしています。

— side · Spain

大嫌いや。あんな奴。許さへん。

そんな風に思っていた。相手も自分を嫌っているのだろつと思っ  
ていたし、寧ろそうである事を願った。なのに。

「今日の会議はこれにて終了だ。各自今日の資料にしっかり目を通  
し次の会議までに纏めておくように」

ロンドンの冬。北の方にあるイギリスだが、気温がマイナス以下  
になる事は少ない。しかし幾らマイナスを超えないとは言えどやは  
りこの寒い中の会議は、誰にとっても苦痛だった。

いつも通りアルフレッドが無茶な案を出しそれにアーサーが突っ  
かかり、フランススが便乗し他国が喋りルートヴィッヒがその場を  
静め、そうした騒々しい会議だったがそれでもどうしても決めなけ  
ればならない議題があつた為に議長国であつたアーサーが何とか自  
分を抑え話を進めた結果、アルフレッドの意見を無視すれば案外す  
んなりと議題は解決した。

アントーニヨは不愉快になる大嫌いな声で告げられたその言葉を  
聞いて、真つ先に席を立ち上がった。愛しい子分の元へと駆け寄っ  
て肩を組む。照れたように聞こえてきた「離せこのやるー」という  
言葉を無視して今日のご飯は外食で何処其処へ食べに行くだの美味

しいお店がどうのなの下らない会話をしながら会議室を出ようとした。

しかし。

「おいカリエド」

先程まで嫌というほど聞かされたその憎憎しい声で呼び止められて、これからの楽しい時間を想像して有頂天だったアントーニヨの気分はどん底まで落ちた。

隣に居るロヴィーノはその声の持ち主が怖いのかびくぶると震えている。しかもアントーニヨに何したんだよとでも言いたげな視線を送ってくるものだから堪ったものではない。

「何やねんクソ眉毛。俺は今からロヴィーと飯食いに行くんや邪魔すんなや」

嫌悪感丸出しの表情で声音でオーラでアーサーに返事する。

いつもならその喧嘩腰の台詞に突っかかってくる筈のアーサーは、何故かそんな事も無く用件を伝えてきた。

「ちょっと話したい事がある。俺が片付け終わるまで待っていてくれないか」

苛立ちの様子は欠片も見せないその様子に、アントーニヨは驚くと同時にアントーニヨの方が苛立ちを覚えた。それでも「はあ？」と心底嫌そうに言う事を忘れない。

それにすら反応せずにアーサーは5分で終わると言い放ち、アントーニヨが舌打ちしながら了承する。

隣のロヴィーノは驚いた様子と怯えた様子を両方見せつつ。アーサーを待つ予定だったのだろうフランスとアルフレッドは驚きの

様子だけを見せながら、アーサーを見つめている。

アントーニヨは片付けを始めたアーサーを流し目に見て、ロヴィーノに先に帰っていいと告げると休憩室へ向かった。

\* \* \*

どんな用があつて今更あの男が話をしに来ただのとか、そういう事は気になるがより気になるのはあの態度だった。

いつもだったら馬鹿みたいに乗ってくるのに、何故か今日はいやに冷静で調子が狂うのだ。

窓から外の様子を見る。そこに居るのは今正に帰ろうとしているフランスとアルフレッドの二人だった。

会話の内容は聞こえる筈も無いが、そこから見える様子ではフランスが何かからかってアルフレッドがそれに言い返している。そんな様子を見て、相変わらずやなあ、なんて感想を抱いた時、扉が開く音がした。

「待たせた」

アントーニヨのその背に投げかけられた言葉は、何か言い様のない高揚を抑えているような感じさえた。

嫌悪と疑いの様子を織り交ぜたような表情で振り返る。

「んで、帰るとこ引き止めての話って何や」

言い知れない苛々が募りアントーニヨを不快にさせる。その苛々

の原因が、あのアーサーの態度にあることだけは解るが、何故苛々するのか解らないのだ。

そしてその態度のせいで疑り深くなってしまふのもまた当然で、  
ついつい探るような視線を送ってしまう。

アーサーが口を開いた。

「好きだ」

休憩室に静かに響く、その声。

アントーニヨが抱く疑問に気付いているくせに、それには一切答えずに本当に用件だけを伝えてきたアーサー。

目を見開くアントーニヨ。

「何やて？」

あまりの信じられなさに、アントーニヨは聞き返した。

「好きだ」

もう一度、アントーニヨの耳に入ってくるその言葉。

アントーニヨは、自分の頭がすっと冷えていく事を感じた。何の冗談だ、と。

確かに今までの関係の事もあるが、そう考えてしまっ一番の理由はアーサーの淡々とした口調だった。

普通、告白しようとする奴はもう少し頬を赤らめるか語尾がつまるかするだろう。特にアーサーみたいなタイプは。

なのにそんな事も無く、ただただ淡々と、本当にそんな事を思っているのかと思えるような、冷めた口調。加えて今までの態度との温度差だ。

「冗談で、そんな事。」

「で？」

嗚呼、苛々する。

アントーニヨは、意味も解らず苛々していた。

「俺は、お前の事なんか嫌いや」

こういふ事を、冗談で言うところも含めて。

そうして帰ってくるのは、冗談に決まってる、俺も嫌いだばーか。そう言った類の台詞だろうと思った。だからこそ、こうやって嫌いだと、はっきり言ってやった。

なのに。

「・・・ああ。そうだろうな」

返ってきたのは、予想通りだとも言わんばかりの台詞。

「・・・・・・・・・・は？」

それは、どういう事だ。

“ああ。そうだろうな”。

その台詞が木霊する。冗談ではないのか？

アーサーの表情を伺うが悲しそうな色は浮かんではない。浮かんでいたのは　諦めの色だけだった。

最初から、拒絶される事を知っていたというのか？解っていたくせに、こうやって、告白して。何の為？どうして？彼の行動を理解する事が出来ない。意味が解らない。

ただ悶々と考えていたアントーニヨは、アーサーの口から漏れた小さな溜息で我に返った。

「知ってる。・・・・・・・・・・そう言ったんだ」

「な・・・・・・・・・・どういっ」

「そのままだ。・・・・・・・・・・じゃあな。それを言いたかったただけだ」

そう言って真後ろあった扉を開いて休憩室を出て行くこととするア



ーサー。

アントーニヨは慌てて声を掛けた。

「どういう事や！ほんなら何なん！？最初から全部本気やったって事か！？」

俺にフラれる事知つときながら告白したんか！！」

必死だった。彼の好きだと言ったその一言の真意を確かめる為に動きを止めたアーサー。しかしアントーニヨのその問いに答える事無くそのまま部屋を出て行った。

何で何で何で。

そればかりが頭を占めて、他の事が頭に入らなかった。

「アントーニヨ？」

扉の方から聞こえた声に、少しだけ期待してしまった。期待して、頭を上げた。けど。

「あ……ロヴィ……か……」

其処に居たのはアーサーではなく、自分のロヴィーノだった。どうやら先に帰っていいと言ったにも関わらず待っていてくれたらしい。

先程嫌いだと残酷に突き放した筈のアーサーが其処に居るわけは無いのに。そもそも、何を期待していたんだ。

「今、あいつ……アーサーの野郎が……」

本人の前だと弱気になって様付けするくせに、本人が居なければ

こつやって強気なロヴィーノ。少し愛しく思いながら、今その名前が出てきた事が嫌で、何とか誤魔化する。

「せや、話終わったらしいんや。飯食いに行こか」

「え？あ、ああ」

アントーニヨの様子がおかしい事に気付きながらそれに触れないでいてくれるロヴィーノに感謝して、アントーニヨはロヴィーノと共に休憩室を後にした。

— side・Spain (後書き)

最初は短編だったものが、他のところで続きが見たいといわれたので連載化したもの。

7ヶ月程前に書いたものなので文体とかその他諸々の今との違いが半端無い。今見返すととてつもなく恥ずかしくなるのはもうしょうがないですよー……。

— side・U・K・ (前書き)

「 side・Spain」のアーサー視点。

いつの間にか、好きだった。

きつかけも理由も解らない。ただ気付けば目で追っていて、気付けば好きだった。

けれどあいつは俺を嫌っているから、ただ遠目に見るだけで良かったんだ。だけど、いつの間にか。そう、いつの間にか、あいつへの気持ちは膨らんでいて、だから、それを封印する事にした。

\* \* \*

「今日の会議はこれにて終了だ。各自今日の資料にしっかり目を通し次の会議までに纏めておくように」

ロンドンの冬。北の方にあるイギリスだが、気温がマイナス以下になる事は少ない。しかし幾らマイナスを超えないとは言えどやはりこの寒い中の会議は、誰にとっても苦痛だった。

いつも通りアルフレッドが無茶な案を出しそれにアーサーが突っかかり、フランススが便乗し他国が喋りルートヴィッヒがその場を静め、そうした騒々しい会議だったがそれでもどうしても決めなければならぬ議題があった為に議長国であったアーサーが何とか自分を抑え話を進めた結果、アルフレッドの意見を無視すれば案外そんなりと議題は解決した。

そうして会議終了。議長国のアーサーは勿論片付けやら何やらをしなければならぬが、他の国はそんな用事も無いのでさっさと帰

る国が多い。偶にアーサーが片付け終わるまで待つのはフランシス、菊、アルフレッドの三人で、しかし菊は元枢軸の二人としょっちゅう一緒に居るので残るのは専らフランシスとアルフレッドだった。

「おいカリエド」

そのまま子分のロヴィーノと帰ろうとしていたアントーニヨを引き止めたのはアーサーだ。今日は会議が始まる前から話したい事があった。だから、こうして呼び止めたのだ。

しかしアーサーの事を心底嫌っているアントーニヨは、呼び止めたのがアーサーだと知った途端心底嫌そうな顔をした。

「何やねんクソ眉毛。俺は今からロヴィーと飯食いに行くんや邪魔すんなや」

いつもならその台詞に突っかかるアーサーは、気にする事など無く「何だ」という問いに答える。

「ちょっと話したい事がある。俺が片付け終わるまで待つてくれないか」

突っかかりもしなければ大して苛立った様子も無いアーサーのその台詞と声音に、アントーニヨは驚きつつもいつも通り「はあ？」と嫌だ、という意思が垣間見える返答を忘れなかった。

それにも反応せずに話自体は5分で終わる事を告げると、アントーニヨは舌打ちしつつも渋々了承してくれた。

その光景をロヴィーノ、フランシス、アルフレッドが心底驚いた様子で、ロヴィーノは若干怯えつつ見てくる。その視線すら無視して、アーサーは片付けを始めた。

\* \* \*

「待たせた」

その後30分程かけて片付けた後、しつこくアントーニヨとの事について訊ねてくるフランシスとアルフレッドを無理矢理帰らせて休憩室で待っていたアントーニヨの元へとアーサーはやってきた。

アントーニヨは窓から外を眺めていた。そこにアーサーが話しかけると、嫌そうな、面倒臭そうな、訝しがるような表情でアーサーを振り返る。

「んで、帰るとこ引き止めての話って何や」

探るような視線を投げかけてくるアントーニヨ。何故彼がそんな視線を送ってくるのかぐらいは理解出来る。いつもなら些細な事にも反応して反論してくるのに、今日はアントーニヨの暴言に対して微塵も反応しなかった事についてだろう。

だが敢えてそこには触れず、アーサーは手っ取り早く用件だけを伝える事にした。

「好きだ」

休憩室に静かに響く、その声。  
アントーニヨは目を見開いた。信じられないものを見る目。  
別に、こつという反応をされる事は解り切っている事だった。

「何やて？」

あまりに信じ難い言葉だったのだろう。アントーニヨは遠慮も何も無く、聞き返した。

「好きだ」

それにもう一度想いを告げるとアントーニヨは、丸くしていた目を今度はすつと細めてアーサーを射抜いた。



意味も無い沈黙が続く。常人ならば耐えられそうにないその沈黙を破ったのは、アントーニヨだった。

「で？」

それは、拒絶の言葉。はっきりと意思を示さない、けれど確実に、拒絶の言葉だった。

「俺は、お前の事なんか嫌いや」

拒絶される事なんて解りきっていた。解りきっていたからこそ、アーサーはこうやって告白した。

いつからかだなんて解らない。気付けば目で追っていた彼を、それだけでは済まなくらいに深く愛してしまったのはアーサーだ。

彼と話したい。彼の視界に入りたい。彼に　　愛されたい。

愛される事を怖がっていたのはアーサーなのに、愛されたいと望んだのもアーサーだ。

そうして暴走しそうになった想いを、欲望に満ちてしまったその想いを。封印する為に想いを告げた。心の奥底にしまいこむ為。一度きりばかりこうやって振られてしまえば、諦めもつくだろうと思っ

た。

そもそも、彼に嫌われている事など知っていたのに何をおこがましく愛を求めていたのだろう。そういう思いがある。

「・・・ああ。そうだろうな」

だから、アーサーにとって彼のその返事は至極当然のもので、尚且つそれが正当という気すらあった。

嫌われるのが普通で、嫌われるのが当然で、嫌われない事など有り得ない。実際、彼はアーサーを嫌っていた。睨んでいた。

ゆえに、当然の結果。  
曲折した、考え。

「・・・・・・・・・・は？」

素つ頓狂な声を上げたアントーニヨ。その表情には驚きと疑問が  
浮かんでいた。

何を不思議そうな声を上げる事があるのか。嫌われている事など  
当然で、それを自分が知っている事だつて解りきつている筈だろう。  
自分を好いてくれた奴を冷たく突き放した事で傷つけるつもりが、  
傷付いていない事が不思議なのか？そうだとしたら、とんだ見当違  
いだ。そして、とんだ捻くれ者だ。

そういう考え方しか出来ないアーサーの方が捻くれている事にア  
ーサー自身は気付かない。アーサーの考えている事を知らないアン  
トーニヨも、知る由も無い。

「知ってる。・・・・・・・・・・そう言ったんだ」

抑揚の無い声で淡々と告げる。

「な・・・・・・・・・・どういう・・・・・・・・・・」

「そのままだ。・・・・・・・・・・じゃあな。それを言いたかっただけだ」

呆気にとられた声で、表情で、どういふ事だと訊ねてこようと  
したアントーニヨの声を遮ってそう言つて部屋を後にしようと扉に手  
を掛ける。

後ろから必死で、そして慌てたような声が聞こえた。

「どういふ事や！ほんなら何なん！？最初から全部本気やったつて  
事か！？」

俺にフラれる事知ったときながら告白したんか!！」

その核心をつく質問に、一瞬動きを止めるアーサー。しかし何か逡巡した後、アントーニョの問いに答える事なくその場を去った。

\* \* \*

休憩室を出て廊下を進む。突き当たりのところで、くるんとまるまった一本の髪の毛が見えた。

「ロヴィーノ」

「っ……!」

話しかけると大袈裟に飛び跳ねるその肩。慣れたもので今更傷付いたりなどしないが、いい加減どうにかならないものだろうか。あの頃のように顔を合わせた瞬間に殴りかかりたりしないというのに、そもそも戦争というものが無くなったこの時代、どうして殴る理由があるのか。

「……話が終わった。カリエドはまだ休憩室だ」

それでもそこには触れず、アントーニョの居場所を教える。

びくびくしたまま、それでも頭を下げてアーサーが今来た方向へ向かって行くロヴィーノ。これがもしフェリシアーナなら頭すら下げずに行く先に居る者の名前を叫びながら猛スピードで走っていくだろう。やはり、何だかんだ言って兄貴なのだろうか。

「はあ……………」

その場にしゃがみ込んで大きな溜息一つ。

「これで…………諦められる……………」

この数年、数十年悩まされたこの想いを、封印できる。

最後の問いを聞く限り、彼の心情を掻き乱したのは確実だろう。  
てつきり動じないと思っていたものだから、意外だった。

彼の心を掻き乱してしまった事に心の中で謝罪する。

ただの自己満足。そんな事は自覚している。

だが、きつとそうやって片思いしたままでいつか想いを爆発させ  
彼に迷惑をかけるよりはきつと、こうやって告白して諦めてしまっ  
た方がいいのだ。自分の為にも、彼の為にも。

「……………好きだったよ     アントーニョ」

好き“だった”。過去形のその言葉で、もう一度愛を囁いた。

いつまでも呼ぶ事を躊躇っていた彼の名前を呼んだ。

そうして、想いを奥底に仕舞い込んで、アーサーは会議場を後に  
した。

— side・U・K・ (後書き)

アーサーは両想いになりたくて告白したんじゃないやなくて諦める為に告白したんだよという事が伝えたくて書いたアーサー視点でした。  
しかしそういう目的で書いたものが連載化した今は既に重要な部分占める大切な話になっています。

二(前書き)

短い。

全くどうして不思議なものだ。

幾ら気持ちに蓋をしようと自ら決めたとはいえ、彼に告白してきつぱりフラれ、割り切った途端に彼に対し胸を占めていた完全なる恋慕の気持ちは鳴りを潜めた。

おかげで昨日までもやもやとしていたのに、今は随分すっきりとした気持ちだ。

「?どうしたのお前。昨日と比べて顔色いいじゃん」

他者にすら　　というか、この腐れ縁に限ってだと思いが(といふか)そう願う。そんな何人にもに解る程であると困る(解るくらいその様子が表に出ていたらしい。

一応弁解しておく、別に失恋が嬉しいわけではない。出来れば実って欲しかったが、そんな事有り得るわけも無いのでそんな事ですつまでもうじうじしているより良い考え、実際そうであっただけの事である。

「別に何でもねえよ」

アーサーがホスト国を務める世界会議の二日目。二日目ともなると一日目程忙しいわけでもなく、勿論暇が出来る程ではないがそれなりにゆったりと、誰かと話しながらやる事くらいの余裕は出来る。だから別に今話しかけてきたフランスに返事をやらない理由は無いわけで(かといつて理由があるわけでも無いが)、無視をするともまた煩く喚くだろうから彼の言葉には一応全て返事をした。

さっきの一言から始まって会議の内容やアーサーの会議後の予定、逆にフランスの予定などまで話が広がったところで、参加国は殆

ど集まり準備も整ったので会議を始める事にした。

昨日の会議と何ら変わらない会議。否、変わる事はあるのだが、それらは細かいものなので挙げていたらキリが無い。ただ、たった一つあげるとするならば昨日はずっと隣のロヴィーノと喋っていたアントーニヨが一言も発さない事だ。会議が始まって終わるまで、ずっと上の空だった。

それでも不思議な事にアーサーはそれに気を取られる事無く進める事が出来た。

\* \* \*

会議終了後。

約束などはしていなくとも、会議前に後のお互いの予定を聞けばそれは何処かへ食事へ行ったり飲みに行くというのが暗黙の了解だった。

「で、何でそんなすっきりしたような顔なの？」

今回は、酒飲みの方だった。

半透明な赤い液体が入ったワイングラスを傾けながら、二人は他愛も無い話から過去話、仕事の話まで語らう。お互い腐れ縁だと揶揄し嫌いだとは言うが、事実がそうだとは限らない。

「……………なんで、だと思っ？」

いつもは誤魔化すところを、アーサーはほろ酔いの状態で今日は



聞き返した。それは酔いも手伝っているが、それだけではない。

「そつだなあ……。告白、したとか？」

誰が誰になどとは口にしない。

アーサーが誤魔化さなかった理由。それは、フランシスは知っているからだ。アーサーがアントーニヨに向けていた感情を。

その上でアーサーを応援した事は無いし、何か協力してもらった記憶も無い。だがそれがこの二人の関係においてはベストなのだ。

アーサーはそれには返事せず、黙った。

沈黙は肯定の意を表すのだと、十二分に理解していた。寧ろ、理解しているからこそアーサーは黙った。彼を相手に誤魔化す必要は無いから。

「そつか。それできつぱりフラれたって事か」

彼の言葉は遠慮容赦無い。

それでもその言葉がアーサーの傷を抉ったりはしない。それが解っていないければ、フランシスはこんな無神経な言葉は口にしない。

アーサーが悪い時は責める言葉も口にするが、今回はアーサーは悪くないのだから。

伊達に腐れ縁をしているわけではない。フランシスは、どれだけ否定しようがアーサーの一番の理解者なのだ。それはアーサー自身認めているし、フランシスの理解者がアーサーである事も自負しているしフランシスもそれを認めている。結局はお互いの存在を、全面的に認めているというわけだ。

「……傷心なら、口説いてただけどなあ」

空のグラスにまたなみなみとワインを注ぎながら、フランシスは

冗談交じりにそういう。

そう、アーサーは別に傷心ではない。確かにフラレはしたが、だからと言って必ずしも傷心とは限らない。傷心でないからこそ、薄く笑いながらこんな馬鹿げた冗談を彼は言う。そしてアーサーも同じように薄笑いしながら「馬鹿じゃねえの」と返せるのだ。

「ていうか、珍しいねお前がそんなほろ酔いなんて。普段はぐでんぐでんになってんのに」

他愛無い会話。それが今日ほどに清々しい気分で作れる日が来ようとは。

「ん？おお、今日はあんまがぶ飲みは」

「アーサー」

しない、と続けようとした言葉は誰かの自分を呼ぶ声に呑み込まれた。

清々しい気持ちだった筈なのに。

振り向いた先には。

## 二（後書き）

とてつもなく短いです。次の話は少し長め？

「アーサー」

清々しい気分で飲んでいたら、自分に呼ぶ声のせいで幾分かその気分が霧散してしまった。

振り向いた先に居たのは声で予想していた通り、

「何だよギルベルト」

ギルベルトだった。

世界会議の参加国では無い筈なのに、ほぼ毎度の如く弟のルートヴィッヒについてきては何をするでもなく会議後フランスやアントーニヨと飲んでいる事が多い。または、ホテルに帰って弟にちよっかいを出すか。どうやら今回は誰かと来たのか一人で来たのか（そうだとすればかなり虚しい行為だと思うが）は定かではないが、偶然アーサー達と同じ場所に飲みに来ていたらしい。

別に彼に呼ばれただけであれば気分を害したりはしない。彼の、自分を呼ぶ声が何故か不機嫌さを含んでいた事に、アーサーが気分を害した理由があった。

「お前……」

普段の彼とは違い、やけに真面目な顔をしている。アーサーは彼に何かをした覚えは無い。何を言われるのかと心持ち構えていると、彼は次の瞬間には突然その場に崩れて情けない声でこう言った。

「お前のせいでアントーニヨが上の空でつまんねえんだよあ〜」

フランスは間抜けな顔をして次の瞬間にはあきれ返った顔になり、アーサーはと言えば、殴りたい衝動を何とか抑えていた。

折角良い気分で飲んでいたというのに、そこを不機嫌そうな声で邪魔をされた拳句理由そのものは果てしなく下らない内容なのだから。

まあ、その理由の「原因」は下らなくはないが。

「んで俺のせいになんだよ」

上の空という事はアントーニヨがギルベルトに昨日アーサーが取った行動を話す事は無いだろうし、幾ら察しが良かろうと本人に話されずには原因が解る筈も無い。加えてギルベルトはいうほど察しは良くない。

何故原因がアーサーだと解ったのか。

「さつき原因聞いたらアントーニヨが、『カークランドが……』  
だけ言っつてその続き言いやがらねえんだよ」

さつき。という事は、此処にアントーニヨも居るといふ事である。幾ら吹っ切れたからと言って、真正面で顔を合わせるのは流石にまだ気まずい。しかもアントーニヨはどうやらしきりにアーサーの言っつた事を気にしているようである。

いや、だが逆にアントーニヨに前に出ていって一言言えばいいのではなからうか。

「お前が原因なんだからちゃんと言えよ」

一人悩んでいると、その背中を押すかのようにフランススがそう言っつてきた。

全く本当に腐れ縁というのは厄介だ。言わなくても伝わるのは何

とも便利のような気もするが、伝わって欲しくない事まで相手は理解しているのだから。

だが、癪ではあるがフランスの言う通りだ。アーサーは、ギルベルトにアントーニヨの場所を訊ねた。

\* \* \*

アントーニヨは苛立っていた。アーサーに対して、苛立っていた。昨日態々呼び出してまで告白したくせに、翌日にはすっかり元通りなのだから。否、元通りというより、寧ろすつきりしたような様子なのが、更に苛立たせる原因だった。しかもロヴィーノの様子がおかしい。

アントーニヨとアーサーの間に何かあった事を解っている上に、昨日からアントーニヨが少し変な態度を取っているから当たり前だと言われるかもしれない。だが、それで説明がつかない程にロヴィーノの様子はおかしかった。アントーニヨを気遣うどころか、何か考え事をしているような、アーサーを気に掛けるような様子を見せている。

それらを考えて今日は会議の内容も頭に入らなかつたし、こうしてギルベルトと飲みに来ても全くギルベルトの話す内容に碌に反応できない。いや、いつも受け流しているだけだが、今日はそれすら出来ないでいる。

そんな風に考え込んでしまって、気付けば同じテーブルについていた筈のギルベルトが居なくなっていた。何処に行ったのだろうと周りを見渡す。今日は客が少ないからかすぐに見つかった。

そして、それと一緒に今の今まで頭の中を占めていた存在も、見

つけてしまった。  
慌てて目を逸らした。  
のに。

「カリエド」

その少し後に、昨日自分に向けて好きだと紡いだその声で、名前を呼ばれた。

どう反応すればいいか迷った。いつも通りに反応すればいいのか。いや、それはあまりにもおかしいだろう。迷った結果、顔だけ向けて言葉は発さない事にした。

見るとアーサーは昨日と何ら変わらない、無表情だった。何か変わった事を敢えて言葉にするとしたなら、やはり「すっきりしている」といべきだろう。昨日の何か激情を抑えたような感じが無いとでも言えばいいのか。

そんな事を考えても無駄と知りながら、延々と考えているとアーサーが再び口を開いた。

「……昨日のは、冗談だ。気にしないでくれ」

その言葉には何処か躊躇いすら感じ取れたが、アントーニヨはそれを感じて尚、その台詞に更なる苛立ちを覚えずには居られなかった。

唯でさえ短気なアントーニヨが、我慢出来る筈が無かった。

「ふざけんなや！」

気付けば机を叩いて立ち上がり、机のすぐ傍まで来ていたアーサーの胸倉を掴んで叫んでいた。

幾ら客が少ないとはいえ、勿論店内に居る数少ない客からの視線

は浴びる。この店のマスターや、カウンター席で飲んでいた客、そのほかの客からの視線など、アントーニヨには関係無い。気になりもしなかった。

やはりからかわれていた。告白されたその時に、一瞬そうやって疑っては次のアーサーの言葉にそれを信じてしまった。どうやらそれが間違っていたらしい。騙されたというショックが思いの外でかった。

「アントーニヨ！落ち着けよ！」

アーサーと、ついでにフランシスとも一緒に、アントーニヨの居るこの席まで戻ってきたギルベルトが止める。が、アントーニヨはそれを無視して更にアーサーに怒鳴る。

「冗談やて！？あんな性質の悪い冗談で、人を騙すんかお前は！」

怒鳴り返してくると思っていた。昨日散々、アーサーの普段との態度の違いを見せられて尚、怒鳴り返してくると思っていたのだ。けれど、やはり彼は黙ったままだった。表情一つ変えやしない。それが短気なアントーニヨを煽る材料だと解っているだろうに、その上で彼は全く表情も変えなければ言い返しもしなかった。

いや、正確に言えば言い返してきたのはきた。ただ、それがひどく静かで、怒りではない事がその「煽る材料」となってしまった。

「大嫌いな奴を騙すのに、性質が悪いも良いもあるか」

完全に、騙すつもりでいた。そして完全に、騙された。

悔しさもあるが、何より本気にしてしまった自分が馬鹿馬鹿しくて仕方が無かった。あんな睨むような視線しかこちらへやりはしなかった男が、あんな罵言しか吐かなかったような男が、何故自分を



好きだななんて一瞬でも本気で信じてしまったのか。

彼の隣に立つフランシスは、最初全く我関せずとも言いたげな態度を取っていたが今は何か言いたげだ。それでも何も言わずに事の次第を静かに見守っている。

「おい、何したんだよアーサー？」

ギルベルトが冷や汗をかきつつ慌てたようにアーサーに訊ねたところで、全く知りもしない声が耳に届いた。

「申し訳無いが喧嘩をするなら外でやってくれよ。他の客の迷惑になる」

此処のマスターだった。

気付けば周りの人間は誰もがアントーニヨ達を見ていて、新しく店に入ってきた客すら一歩店に足を踏み入れた状態で止まっていた。

「ああ、すまない」

アントーニヨより素早く反応したのは勿論アントーニヨより冷静だったアーサーだ。

フランシスは喧嘩せず見守っていた状態なので、喧嘩に参戦しているとは思われていない。ギルベルトは会話に参加していたので喧嘩しているとは思われておらずとも、仲間だとは思われているだろう。

潰れる程に飲んだアーサーならいざ知らず、未だ正気を保ったアーサーだ。多分、アントーニヨより上手くこの場をやり込めるだろう。

「俺が出るからこいつらは置いておいてくれないか。」

フランスス、代金だ。これで足りるだろ、後で出しといてくれ」

アーサーは何の迷いも無くそう言いながら、フランススに紙幣を渡した。

彼にそのつもりが無くとも、その台詞はアントーニヨを 正確に言えばアントーニヨとギルベルトを庇う発言だ。

納得がいかない。大嫌いだと称した相手を庇うなど。いや、彼に庇っているつもりは更々無いのだろうが、それでも事実上庇われている事になるこの現状が気に入らない。

フランススはフランススで、その受け取った代金と自分の分だろう、財布から取り出した紙幣をこちらへ寄越して、先程の台詞を言ったきり出て行ったアーサーの後を追っていった。

それをギルベルトと二人で見送った後、苛々が静まらないままどかつと椅子に座りなおす。

「・・・何があつたんだよ」

訊ねる風ではなく、独り言のようにぼそりと呟いたギルベルトは同じようにアントーニヨの向かいに座る。

その言葉は本当に独り言だろうと自己完結させ、ギルベルトのその問いには答える事無くグラスの中に半分程残っていた液体をいき飲み干した。

\* \* \*

出来るのならば、この気持ちを冗談だなどと言いたくは無かった。

この気持ちを嘘だなどと言いたくは無かった。ましてや騙すためやからかうための手段だなどと。

好きや愛しているという言葉は少しの決心で口に出れるものではない。少なくとも、アーサーにとっては。

「好き」にも「愛してる」にも重さや想いが込められている。謂わば一種の呪いの言葉。自分を、時には相手をも傷つける、呪いの言葉。

そして、誰にも言われた事の無い、“未知”の世界へと繋がる言葉。

それを口にする事が、どれだけアーサーにとって重要なものか。

「アーサー」

酒場を出たアーサーに、後ろから聞きなれた腐れ縁の声が掛かった。振り向く事はせず立ち止まる。

フランスがあのままアーサーの後を追って店を出てくる事は何となく予想していた。だから店を出たというわけではないが。

ただでさえ人通りの少ないこの広めの路地は、いつの間にかどんより曇った空のせいか更に人が少ない。多分、此処まで歩いてくるのを狙って話しかけたのだろう。

「ほんと、お前って不器用で意地っ張りだねえ」

呆れたような声。それを聞いて、アーサーは勢いよく振り返る。

きつ、と睨んで怒鳴りつけてやろうかと思ったのに、口を開けば泣いてしまいそうそれが出来なかった。

アーサーにとって、あの告白は幾ら気持ちに蓋をするつもりだったとはいえ、決して軽いものではない。嘘でも冗談でも、ましてや彼を苛立たせる目的で言ったわけでもない。

蓋をしたというのに、その蓋にかけた鍵が早くも壊れそうな状態

だった。

「自ら自分を傷つけてどうすんの。本当はあいつの事好きで好きで仕方無いくせに」

フランススは先程から残酷な台詞ばかりを放つ。それでもアーサーはそれに対しては怒る事など無い。フランススが何を言いたいのか、自分に何をさせたいのか、解るから。

それでも素直にそれを実行できない。睨みつけたまま、口を引き結んで拳を握り締めている。動く事すらせず、フランススを睨み続けている。

「弱いくせに、何我慢してんの」

ひどく優しい声音だった。

フランススは時折ひどく優しく、同時にひどく残酷だ。それが優しさと、フランススなりの気遣いと慰めだと解っていながら、アーサーにとってそれが時々残酷なものへと変化する。それは気の持ち様だとは解っているのだが、何百、何千年とかけて築き上げられてしまったこの性格と、それから思考回路は直しようが無い。

けれど、その残酷な優しさは今まで幾度もアーサーを救ってきた。今回も、そうだ。

「・・・つく、」

溢れる雫。頬を伝って流れ落ちた。冷たいアスファルトの地面に黒い染みが出来ていく。一度解放される事を知った涙は、止まる事を知らない。

イギリスに雨が多いのはアーサーがよく泣くせいだ。そう言葉にする国は少なくない。実際、そうなのだろう。アーサーの心情を表

すように、雨が降り始めた。

雨に濡れる事も厭わず、フランシスはあまり身長が変わらないアーサーの頭を自分の肩に寄せて、その頭を片手で抱え込んだ。

「泣け泣け。雨降ってるから誰にも見えないよ」

アーサーは声押し殺すように泣き続ける。もう涙なのか雨なのか解らなくなっても、静かにフランシスの肩を借りつつ泣き続けた。フランシスも、そんなアーサーに文句を言うわけでもなく、ずっと傍に居る。

雨は、そんな二人を打ち続けた。

### 三（後書き）

三話目。

結局英が一番頼れる相手は仏だよね！っていう。

好きなのは西でも、頼るなら仏。そもそもあまり頼らないけど、仏が強引に頼らせるというか、上手い事英の弱いところ引っ張り出してやるというか。

英は英でもう仏の前で意地張っても無駄だって解ってるから、最後まで虚勢張り続けるけど一度それが決壊したら仕方が無い（飽く迄英の中では）から頼る、みたいな。

英の中では「頼らせてもらう」と「頼ってやる」と「頼る」の三つが全て混じり合っていると信じてる。

上辺は「頼ってやる」なんだけど、心の奥底、英も自覚してない部分で「頼らせてもらう」って思ってた、上辺を取っ払った単純な本音は「頼る」みたいな。自分で言ってる意味不明ですけども。

四（前書き）

ロヴェイーノ視点

#### 四

ロヴィーノは、ひどく沈鬱な面持ちでアントーニヨと共に（別室ではあるが）取っていたホテルに戻った。

二日連続の世界会議に疲れる、などという事は今更無い。酷い時は一週間以上続く事があるのに、たった二日で疲れていたのでは保たないだろう。

今、沈鬱な面持ちでいるのは別の事が原因だ。

今日はそもそも、朝から普段とは違う態度で居たのは自分で気付いている。何処かの鈍感とは違ってロヴィーノはそこまで鈍くない。ホテルの部屋に戻った途端に、急に降り出した雨のせいですぐ濡れになってしまった服を脱ぐ。ハンガーにかけて部屋に片隅に吊るしてから、備え付けのそれなりに設備の良い風呂に入る事にした。

脱衣所で服に手をかけた時、部屋のドアが勢いよくどんと叩かれた。勿論、ただでさえへタレとして知られているロヴィーノは肩を跳ねさせた。

しかし。

「ロヴィーノおゝ、親分来たでー！」

酔っ払っている事丸解りの台詞を叫ぶそれは、この部屋の近くに止まっている人々の迷惑にしかない。

よく知る相手だとわかった途端に平常心を取り戻したロヴィーノ（勿論一度早まった鼓動は早々直らないが）は、すぐさまドアの方へ向かいドアを素早く開けた。

「うるせえ迷惑だこのやるー」

開けた途端になだれ込んでこようとしたアントーニヨの口を塞い



で、反射的に少し抑え目の声でそう言った。

アントーニヨも強制的に黙らされたが、手をどければきつとまた喚き始めるだろう。取り敢えず部屋の外に居させても周りの部屋への迷惑になるだけなので入れる事にした。勿論手はどけずに。

一人ベッドというには少し大きすぎるベッドのところまで移動して、ロヴィーノは溜息を吐きながらそのベッドに座る。

泊まるだけが用途のこのホテルに、椅子や机という設備は無い。辛うじて等身大の鏡やその傍に櫛などがさげられているが、正直男ともなればあまり使わない。一人部屋を頼んだわけだし、ベッドも二つと無い為、二人とも同じベッドに座るしか無いわけである。

ロヴィーノは、そんなわけで隣に座ったアントーニヨの酒臭さに顔を顰めた。

そもそも、アントーニヨがこんなになるまで飲む事自体、珍しい。偶にこうなるが、大体そういう場合、苛々するような事があつた時だ。

原因は様々だが、アントーニヨは短気とはいえ非常に朗らかで寛容な性格をしている。そんなに激怒する事の方が少なく、かなり珍しい。

「聞いてやロヴィーノ」

ドアを開ける前から愚痴られる事を覚悟してはいたが、本当に吐き出し相手に俺を選ぶのは勘弁してほしいとロヴィーノは切実に思う。あまり知り合いが居ないならいざ知らず、アントーニヨはその人柄から友人が多いのだから、他にも愚痴を漏らす相手なら沢山居るだろう。

濡れまくったロヴィーノとしては、さっさと風呂に入りたいと願うばかりだ。

そんな思いを抱えるロヴィーノの心情など知る由も無いアントーニヨは、顰め面で溜息を吐くロヴィーノを他所に勝手に話し始める。

最初は会議中のどうでもいい話から始まって、ギルベルトのうざさへと移る。その話があまりにも長いものだから、まさかこんな下らない事でここまで飲んだりはしないだろうと訝しがっていたら、数刻前見た光景をありありと思い出させる話へ移った。

「あんのクソ眉毛が性質悪い冗談で人を騙してやな・・・」

それを聞いただけで、ロヴィーノの気分はまた重く沈んだ。

それにも気付かずアントーニヨは話を続けている。酔っ払っている故か、その時の状況が詳しく解るように話すわけでもなし、寧ろ順序が滅茶苦茶で普通なら意味が解らない。

それでも、ロヴィーノは何となく、その時の状況が少しだけ見えた気がした。

話を聞けば聞くほど、ロヴィーノの気分を沈みに沈む。そして意味の解らない苛々が積もる。

「・・・・・・・・アントーニヨ」

今隣に居る者の名を呼ぶ。我知らず、低い声が出た。

アントーニヨに対し、今まで抱いた事の無い言い知れない怒りを覚える。

アントーニヨはいつもならロヴィーノの変化に敏感なのに、飲んでいるせいで解りやすいこの態度の変化にすら、気付かなかった。

ロヴィーノは立ち上がる。

「俺は風呂入るから出てけ」

半ば睨みつけるようにしてそう言うが、アントーニヨは全く怯む様子なく「えー！何でなん!？」とまた騒がしく喚く。

そんなアントーニヨを氣遣う様子も無く（というか酔っ払いに氣

を遣えという方が無茶な話だ)、アントーニヨの背中を押して無理矢理部屋から追い出した。

いつもなら風呂に入るからと言って部屋から追い出したりはしないが、今回は事情というかロヴィーノの心境が違う。このままアントーニヨの話を聞いていると、更に苛々し始めるだろう事が自分で予想出来た。

アントーニヨに言った通り、また脱衣所に入っては服に手をかけながら、苛々する原因である一連の事に思考をやった。

まずこの原因というものの事の発端は昨日の会議後までに遡る。

\* \* \*

ロヴィーノは会議場のある一角にて、アーサーとアントーニヨの話が終わるのを待っていた。

雨は降っていない。ただ、少し雲が多い日だった。

アントーニヨには先に帰っていいと言われたが、夕食を一緒に取るという約束もあったし、そもそもホテルも別室ではあれど同じ場所だ。帰ったって暇なだけなのだから、待っていたってロヴィーノには何の支障も無い。

アーサーの様子からして真面目な話なのだろう事は予測がついた。壁に寄り掛かって夕食の事やベツラの事などを考えていると、突如会議場に響いたアントーニヨの叫び声。内容までは聞こえなかったものの、突然すぎて肩を跳ねさせた。

「……何なんだ？」

角から休憩室へ繋がる通路へ顔を覗かせて、しかしすぐに戻す。

「ロヴィーノ」

「っ……！」

それから一分もしないうちに、ロヴィーノが一番苦手とする相手に声を掛けられて、息を呑んでまたも肩を飛び跳ねさせた。

それから少しの間沈黙してから、逡巡するようにアントーニヨがまだ休憩室に居る事を告げてきたアーサー。そんな彼に軽く頭を下げて早くその場を離れようとしたら、布と何かが擦れた音と共に溜息が聞こえてきた。

溜息を吐く事自体は何もおかしな事ではない。ただ、布と何かが擦れた音はきつと、しゃがみ込んだ音だ。

何故、しゃがみ込むのか。それが不思議でならなくて、ロヴィーノは数歩進んだところで立ち止まった。

「これで……諦められる……」

更に聞こえてきた声には、その言葉通りの諦めと、少しの切ない響きが含まれていた。

まるで失恋でもしたかのような、台詞と声音。

しかし実際、それは間違っていなかった。

「……好きだったよ　　アントーニヨ」

過去形の告白の台詞と、今まで誰の前でも呼ばなかったアントーニヨの名前。

彼は、アントーニヨが好き　だった。

その事實は、ロヴィーノにひどく大きなショックを与えた。彼は本当に、失恋したのだ。アントーニヨは彼の事を大嫌いだと公言し

ていた。変に素直なアントーニヨだから、きっとそのままの事を伝えただろう。きっと彼は酷いフラれ方をしたのだろう。

今やっと、彼を怖がる必要など無いのだと悟った。彼は昔のような傍若無人の男ではない。“普通”の心を持った、傷付きやすい不器用な男なのだ。

それを知った瞬間、今までロヴィーノが取ってきた行動が馬鹿らしく思えた。同時に、彼は既に嫌われるべき対象としてではなく、愛されるべき対象として存在しているのでは無いかと、そんなことさえ考えてしまった。

そこまで考えたところで、これ以上此処に居ては流石にバレるだろうと、忍び足で休憩室へ向かう。

そこで、アントーニヨは茫然としていた。

\* \* \*

翌日……つまり今日、会議中も、ギルベルトに飲みに行く事を誘われた時も、ずっと上の空だったアントーニヨ。

誘いには乗ったが、多分居酒屋でも上の空なのだろうなと何となく予測していた。

会議室を出るところで弟に呼び止められて、アントーニヨへの言伝を預かった。丁度ホテルに向かう道の途中で曲がってそれから少し進めば、ギルベルトの言っていた居酒屋につく。ホテルに帰る前にアントーニヨのところへ行くこと、居酒屋へ向かう事にした。雨が降り出した為に急ぎ足で曲がり角を曲がったところで、その光景を見た。

雨に濡れながら、フランスに縋り付くようにしているアーサー

を。それはひどく痛々しい光景だった。

多分、あの時アーサーは泣いていた。遠目ながら微かにではあるが、彼の肩が震えているのを見たから。

何故泣いているのか。何故そこを行くと居酒屋しか無いその道中で、泣いていたのか。居酒屋で何かあったのか。昨日の事が関連しているのか。色々な考えが浮かぶが、答えは見つからなかった。

雨が降っているというのに、ロヴィーノは暫く其処から一步も動けなかった。

その後結局居酒屋には行かず、こうしてホテルへ戻ってきたわけだ。

そしてそのホテルで、彼が泣いていた理由を知る事になった。

昨日の事は関連しているし、居酒屋で何かあったのも明確だ。

「（性質悪い冗談で騙して？・・・そんなわけないだろアントーニヨの馬鹿）」

アントーニヨの言葉で意味を持っていた文章は最初にアーサーの話をし始めたその一文だけである。後は単語と単語の間に愚痴を入れて喋る為、その単語同士を上手く整理して話を纏めなければならぬ。

最初の頃はそんな高度な事は出来なかったが、何度か酔っ払ったアントーニヨの愚痴を聞くうち出来るようになってしまった。要らない成長だ。

それは兎も角、アントーニヨの言葉を断片的に拾い整理すると、昨日のアーサーの台詞を聞いていればこう解釈する事は楽だ。

つまりアーサーがアントーニヨに、「昨日の告白は冗談だ、お前を騙す為だ」と言ったわけだ。

そんなわけが無い。冗談なら、何故あんな切ない響きを持った言葉を放つ事が出来るのか。アントーニヨは告白された本人のくせに、その冗談だという言葉の本気として受け取ってしまった。

「（お前が・・・お前が、冗談だと言わざるを得ないような事したんだろーが）」

ただの推測ではあるが、きっと、限りなく真実に近いだろう。

アントーニヨは本当に、彼を恋愛感情で好いている相手に対してとても残酷だ。

それはアーサーのみに限らない。今までアントーニヨに告白（勿論国だとはバレていない）し、アントーニヨの鈍感さで酷い失恋をした女は幾らでも居た。

「アントーニヨのばかやろー！！！！」

アーサーとアントーニヨの事でひどく悩んでいる自分がいる事や、アントーニヨの鈍感さに対する怒りをその叫びにして吐き出し、ロヴィーノは先程座っていた部分が湿ってしまったベッドに横になった。

#### 四（後書き）

ロヴィーノ視点でした。

あらすじにも書いてある通り、この話はあるん兄弟と悪友＋米、ときどき日がでしゃばります。その中でも最重要なのは他でもないこの子分様。

しかも途中でロマ英要素もあるので、主人公（？）となる西と英の次に重要な役割を担っています。

ロマ英展開に早くしたい……。



## 五

居酒屋で争いがあつたあの日から、二日。会議は今日で終わり、各々がついでに観光していたり、そのまま帰つたりと自由に羽を伸ばし始めた。

観光地が多く収入の何割かを観光により手に入れているこの国は、雨は多いがやはり会議終了後に観光して帰る者も少なくは無い。

ただ、そんな事関係無く仕事があるアーサーはと言えば、自国で会議が終わるや否や、真つ先に家に帰つて仕事をし始めた。

『あいつを想つて泣くのは今日で終わり!・・・わかった?』

雨が降る中、フランシスの肩を借りて泣いた時、フランシスは落ち着いてきたアーサーにそう言った。アーサーは元からそのつもりだった。外れかけた鍵を再びかけるのは容易くは無かったが今は落ち着いている。

落ち着いているだけで、その日、事が起きるまでのすつきりした気分は皆無だったが。

ある程度仕事を終わらせた後、椅子から立ち上がつて道具を持ち庭へ向かう。

仕事はそこまで切羽詰っているわけではない。勘違いされないように言つておくが、真つ直ぐに帰つてきた理由は昨日の事が原因ではなく、ただ単に庭の手入れが不十分だったからだ。

玄関を出て一歩足を前へ進めた時、何やら塀の向こうから話し声が聞こえてきた。

「無理だよお、アーサー怖いよ」

「いいから行くぞ!お前が思つてるような奴じゃねーかもしれないだろっ!」

どうやらよく見知った相手らしい。しかも国民の近所の人たちと  
かではなく、国だ。

だが何故此処に居るのか。いや、それも気になるがそれよりも、  
会話の内容の方がアーサーには気になった。

足音をさせないように塀に近付いてそつと様子を覗く。何となく  
声色やいつもの様子から想像してはいたが、その会話をしている二  
人のうちの片割れは泣いていた。

しかも情けなくそれを隠そうともせず。

「だったら兄ちゃん一人で行ってきなよ〜」

「一人で行ったら怖いだろ〜が!」

「何かそれ矛盾してるよ兄ちゃん・・・」

全く以っていつも通りの風景だ。・・・それをしているのが、此  
処で無ければ、の話だが。

いつも通りのヘタレっぷりを見せているのは、フェリシアーノと  
ロヴィーノだ。

どうやらロヴィーノが無理矢理フェリシアーノを連れてきたよう  
に見えるし聞こえるが、フェリシアーノと同じくらいアーサーの事  
を怖がっていた筈のロヴィーノが、何故アーサーの家に態々やって  
きたのが全く解らなかった。

「兎に角行くぞ!」

うだうだと言い争っていた二人だが、ロヴィーノがフェリシアー  
ノの手を取り歩き出そうとする。

こちらに歩いてこようとするのにどうすればいいのか解らなくな  
って、結局こちらから話しかける事にした。

「行くつて、俺んちに、か？」  
「だからさつきからそう言っ……て……」

だが、少々混乱していたとはいえあまりに迂闊な発言だったかもしれない。

さつきも言ったがこの二人は必要以上にアーサーを怖がっている。そんな二人の目の前に、何の前触れも無くアーサーが現れ声を掛けたりなどしたら、勿論。

「ひゃああああ！」

「うわああ！」

こうなるに決まっている。

ロヴィーノはいつも程怯えた様子は無く、純粹に驚いたのが半分、怯えたのが半分と言った感じた。何故急に、ロヴィーノの自分に対する態度が変わったのか理解出来ないし原因すら解らない。

フェリシアーノなんかは態度を微塵も変えず、ロヴィーノが叫びを止めた後でもずっと喚き泣き叫んでいる。

こういう時、アーサーはどうすれば良いのかが全く解らない。ルトヴィツヒがいればその後ろに隠れこちらの様子を伺ってくるに限るし、そうでなければ逃げてゆく。

そういう反応には慣れていたが、その場で泣き叫ばれるのはあまり無い経験だ。どう対応すればいいのか、どう話しかければいいのか、全く解らないのだ。相手は自分に怯え泣いているのだから、慰める事も容易ではない。というか、慰めるという考え自体、間違いだ。

不用意に近づけない上に話しかけられないのではどうする事も出来ず、自分に少し怯えながらも冷静さを保つロヴィーノが何か助け舟を出してくれる事に賭けて黙っていると、やっとロヴィーノが行動に出た。

「うるせえっ」

ロヴィーノがその手で未だに喚いていたフェリシアーノの口を無理矢理塞ぐ。

遣り方が少々強引すぎやしないかとは思ったが、おかげで静かになったし、騒ぎにならないうちに事は静まった。そしてこの状況ならもしかしたら、アーサーの話も聞いてもらえるかもしれない。

取り敢えず何か言おうと口を開いたとほぼ同時に、ロヴィーノが話しかけてきた。

「に、庭見せやがれ！」

命令形なのは彼なりの強がりなのだろう。まだ少し怯えているとはいえ、その怯え方が随分小さくなったのはアーサーとしてはとても嬉しい事だった。

だから普通に言われたならムツとくるだろうその台詞も、普通に受け入れる事が出来た。

しかし、だ。

「……それはいいが、何で急にうちに来たんだ」

疑問はそれだった。しつこいようだが、彼らは尋常ではない程アーサーを怖がっていた。今までなら何があってもアーサーの家を訪問するなどという事は、絶対に無かつただろう。

それがフェリシアーノの態度は変わらないとはいえ、ロヴィーノはこんなに冷静で強気だ。しかもアーサーに面と向かって誰の後ろに隠れるでもなく、きちんと言葉を放つ。

これを揃えて不思議でない筈が無い。

それでもロヴィーノは言葉を詰まらせるだけで答えようとはしな

かった。

「……まあいいか。ほら、見たいなら思う存分見てけよ。丁度俺は今手入れするところだったし」

もしこれで誤解（誤解という少し語弊があるかもしれないが）が解けるのなら、まあ何でもいいかと思いついて理由はこれ以上追求せず庭へ入れた。

庭は手入れする前だから少しいつもよりは汚いが、少し弄ればすぐにいつも通り綺麗になるだろう。最近はその時間が無くて手入れしていなかったから、今日は入念にやる必要がある。

ロヴィーノ達は、庭先に立っただけで立ち止まってしまった。

「……？どうした？入れよ。折ったりさえしなければ触ってもいい。ただし、優しく丁寧にな」

自分の自慢の庭を見たいと言ってくれるのは嬉しい。庭だけに限らず、刺繍や紅茶や、アーサーが得意とするありとあらゆるもので、誰かに美味しいや綺麗、上手だと言ってもらえると、アーサーはひどく舞い上がってしまう。

昨日あった事は忘れられないが、だがしかしそれを紛らわせるくらいに上機嫌に、アーサーは庭の手入れを始めた。

彼らはゆっくりと足を踏み入れては庭に咲く様々な種類の花を見続けている。

花に興味でもあったのだろうか。随分熱心に見ている。けれど彼らが植物が好きだという話は聞かないし、植物に対する知識もそんなに無い筈である。

本当に彼らは今日、理解不能な行動を取ってくれる。

植物を熱心に見ている者には、どうしても植物に関する蘊蓄を語りたくなるのがアーサーの性だ。が、彼らが相手なら話は別だ。い

きなりそんなものを語りだそうものなら、少し口を開いただけで盛大に怯えられるだろう。今までがそうだったのだから。

「あー！」

突然フェリシアーノの声が上がった。最初はロヴィーノに引っ付いて見て回っていたフェリシアーノは、いつの間にか少し離れて二人とも個人で見えるようになっていた。

ロヴィーノがその声に反応してフェリシアーノが居る場所へと近付く。と、ロヴィーノもフェリシアーノの傍についてすぐに「あ」と小さく声をあげる。

アーサーの位置からでも、フェリシアーノとロヴィーノが何かを熱心に見ている事ははっきりと解った。

「どうしたんだ？」

声を掛けてみる。案の定、フェリシアーノからは短い悲鳴のようなものが返ってきたが、ロヴィーノはそんな事も無く無言で先程まで見ていたのだろう花を指差した。

「……デイズー？」

彼らが見ていたものはデイズーだった。

どの花が特別目を引くという事は無い筈だ。何故彼らはその花に惹かれたのか。

「（ああ、そうか）」

答えはすぐに出た。

デイズーは、彼らの国花だ。

なら、デイジーに反応してしまったのは普通だとまでは言わないがおかしくはない。だがまあ、こうしてじっと見つめているのは少し変かもしれないが。

「……欲しいのか？」

少し考えて、訊ねてみる。もしそうであるのなら、アーサーは惜しみなくやるつもりだ。確かに花は大切だし盗まれたり折られたりするの嫌だが、きちんと欲しいと言われてプレゼントするのは全く悪い気はしない。寧ろ庭を見たいと言われるのと同様、嬉しくすらある。

二人は勢いよく縦に頭を振った。

「そうか」

思わず笑みが零れた。

\* \* \*

色々考えた結果、ロヴィーノはアーサーと仲良くなる事にした。

アントーニヨに対する苛々は考えれば考える程募るばかりで、おかげであの時からアントーニヨの扱いがぞんざいになっていた、と思う。

アントーニヨは案の定あの時の事を憶えていなかったようで（憶えていたとしても同じ事ではあっただろうが）、ロヴィーノがそんな態度を取る理由も解らずにおどおどしていた。少し、いい気味だ

と思った。

本当なら、今日この日はフェリシアーノと一緒にすぐに帰国したり、アントーニヨと一緒に食事へ行ったり後適当にぶらぶらするのだが、今日ばかりはルートヴィツヒと何処かへ去ろうとしていたフェリシアーノを捕まえて、そのままアーサーの家へやってきた。

それというのも、やはり怖がるべき対象ではないと気付いたとはいえ、少しだけ彼の事が怖いからだ。つい先日まであれほどまで怖がっていた相手を突然全く怖がらなくなる方がおかしい。だからフェリシアーノを連れてきた。

フェリシアーノは勿論ロヴィーノが見た彼の“あの一面”を知らない。ゆえに、怖がる。

もう一つ言い訳がましく言ってしまったえば、フェリシアーノのアーサーに対する誤解を解く事も目的だった。

だがまさか、こんなに早くに誤解が解けるような一面が見れるとは。しかもこの表情は、ロヴィーノ自身意外すぎると感じるものだった。

昔の殺人鬼を思わせるような冷たい笑みではなく、嘲笑うような冷笑ではなく、ただ陽だまりのような優しく柔らかい微笑みを、アーサーは見せた。

そんな笑みを見た事は、少なくともロヴィーノは無かった。

ロヴィーノの中で、何かが弾けるのを感じた。

「紅茶入ったぞ。取り敢えずいったん終わってティータイムにしよう」

あの笑みを見た後、彼は固まったロヴィーノとフェリシアーノに気付く様子も無く「待ってる」と短く告げると、いったん家に引っ込んでものの数分で道具を持って出てきた。

花の摘み方を教えてやるから好きなものを持っていけとの事だった。随分気前が良いものだ。



だが確かにこの庭に咲く花はどれも綺麗だ。花は綺麗だと感じつつも、そこまで興味が無いロヴィーノですら、持つて帰りたいと思う程だった。だから言葉に甘えて花を幾らか摘ませてもらっていると、アーサーから声が掛かった。

庭に居ないと思えば、紅茶を淹れていたらしい。

そういえば、フェリシアーノと仲の良い菊から彼は花を育てるのだけではなく紅茶を淹れるのも上手なのだと言った事がある。しかもこんな綺麗な庭を眺めながら飲むのだ。美味さも倍増だろう。

「やったあ、俺丁度喉渴いてたんだ」

フェリシアーノはすっかりアーサーに懐いた様子で、ティータイムの準備をしているアーサーの元へと走っていく。全く我が弟ながら単純なものだと思う。ロヴィーノも人の事は言えないが、フェリシアーノ程では無い。

だがロヴィーノも、これで完全にアーサーを怖がる理由が無くなった。少しだけ残っていた彼に対する恐怖心も、完全に鳴りを潜めた。

「急に来たからお茶請けは用意出来てないんだが・・・すまない」

本当に申し訳なさそうに眉尻を下げる彼に、ロヴィーノは寧ろ安堵した。紅茶は美味いと評判だが、逆にお茶請け・・・というか料理は全般的に不味いと評判だから。

フェリシアーノはそんな事関係無いとばかりに椅子に座る。ロヴィーノもそれにならって用意された椅子に座る。よく見ると、アーサーが座る予定だろう椅子だけ種類が違った。

足りなかっただけだろうと自己完結して、そこから視線を外して紅茶へ目をやる。小さく湯気が立っているこの紅茶は、彼の手によって淹れられた以上この温度が一番良いのだろう。仄かな香りが鼻

腔をくすぐる。

少しだけその香りを楽しんだ後、一口口に含む。フェリシアーノを見ると殆ど同じような仕種をしている。やはり何だかんだ言って兄弟らしい。

「・・・美味しい」

ぼそりと呟く。思わず口を突いて出たと言っても過言ではない。本当に、ほぼ無意識にこの言葉が出ていた。

「そ、そうか？」

はにかんだように笑うアーサー。その表情は昔とは全く違う、日常の中に在るべき笑み。平和なこの時代に、平穏なこの世の中に、在って然るべき笑顔だった。

やはり、来て良かった。彼は、もう昔とは全く違う。怖がる必要は無いのだと、最終確認が出来た。

「すごい美味しいよ〜！ね、兄ちゃん！」

フェリシアーノも、彼を怖がらないようになった。彼の周りに人が集まれば、失恋という寂しさも紛らわせるのではないか。

頭の中でそんな事を考えながら、フェリシアーノの問いに「ああ」と躊躇いがちに答える。先程は自然に口から出ていたが、普段は人を褒める言葉などは滅多に言わない。何だか素直に美味しいと認める事に抵抗があった。

それはロヴィーノの性格が由来しているからもう今更どうしようもない。

ちらつとアーサーの方を見してみる。会議中などでは想像も出来ないくらい、赤面しおどおどしている。会議の時は澄ました態度を取

っているのに、成る程こちらが本当の彼の姿らしい。

会議の時もこのような様子を見せれば愛嬌もあるしもつと周りに人が寄るだろうに、彼はそれをしない。するようなきっかけが無いというのもそうかもしれないが、まず第一に彼の不器用さが問題だろう。手先は器用なくせに、その他の面で彼はひどく不器用らしい。それはロヴィーノも、人の事を言えた義理ではないけれど。それでも彼ほどではない。

アーサーの淹れた紅茶を嗜みながら、ロヴィーノは傍に置いている先程摘んだ花を見た。

\* \* \*

ギルベルトは疲弊していた。

二日前アーサーとアントーニヨの事でごたごたに巻き込まれたかと思えば、今度は自分が冷たいとか何とかでアントーニヨの愚痴を聞かされ、ギルベルトとしてはいい加減にしてくれと全てを投げ出したい気分だった。

お悩み相談所ではないのだからと言いたいが、ことある毎に一緒に居るアントーニヨがギルベルトのところに来るのはまあ、当然といえば当然かもしれない。

今はフランススの家に居るというのに、フランススはギルベルトの「腹減った」という発言が元で、今はキッチンに居る為この場には居ない。本当であれば一緒にアントーニヨの愚痴を聞き、一番慰め役、もしくは相談相手に適している筈のフランススは、アントーニヨの愚痴を聞かされていないというわけだ。

「（俺様可哀想すぎるぜー・・・）」

心の中で呟く。その間もアントーニヨの愚痴は止まず、今は酔っていないからか、ギルベルトが聞いていないと分かれば怒鳴られるだろう。全く損な役回りである。

だが聞くと、もしかするとロヴィーノが冷たく接するのは二日前にあるのではないかとも思う。アーサーとの争いが関係しているかどうかまでは解らないが（というかあれほどまでアーサーを怖がっていたのだから関係無いとは思うが）、あの日のアントーニヨは酔っていた。酔った勢いで何かあの子の癪に障るような事を口走ってしまったのではないか。

飽く迄推測ではあるものだが、多分限りなく正解に近いだろうとギルベルトは思う。

「お待たせー。お兄さん特製料理の完成だよ」

アントーニヨの愚痴はまだまだ続きそうだと辟易していたところに、フランシスが両手に料理を持ってやってきた。その匂いと言葉につられてか、アントーニヨの愚痴も止んだので一安心だ。

料理を運ぶのを手伝う事にして、席を立つ。アントーニヨは勿論、手伝おうともしない。なにやら着信を知らせる音楽が鳴って、携帯を取り出している。

それを横目にキッチンのある方へ向かおうとしたところで、後ろから突如声が上がった。

「あああああ！」

思わず肩を跳ねさせる。フランシスも同じくして、危うく料理を落としそうになっていた。

「何だよ!」

驚きから思わず半ば怒鳴るように訊ねると、携帯のメール受信画面を此方に見せながらアントーニヨはそれは嬉しそうに、

「ロヴィからや!」

と叫んだ。

がくん、と肩を落としそうになるのを堪えて、「そりゃ良かったな」と言うが、その投げやりな言い方なのもスルーしてそのメールをかじりつくようにして見ている。

フランシスは最早それすら気にしないようにしてテーブルに料理を並べている。ギルベルトもそれに倣い、料理を運び始める事にした。

「……っ!」

一度キッチンに入り料理を持ってテーブルまで持ってくる。フランシスがそれと入れ違いになるようにキッチンへ姿を消した時、突然息を呑むような音と共にアントーニヨが勢いよく立ち上がった。

驚いてアントーニヨを見る。全く今日は驚かせてくれる、と呆れながら今度は何だと表情を伺っていると、先程までの嬉々とした様子は何処へ行ったのか、驚いたような様子と憤っている様子が入り混じった、複雑な表情をしていた。

何故普段から可愛い可愛いと自慢してくる子分からのメールで、そんな表情をするのが解らなかった。よっぽど酷いメールだったのだろうか。

「……おい、アントーニヨ?」

恐る恐る名前を呼んでみるが、反応は無い。

「何、どうしたの？」

キッチンに消えたフランシスが料理を持って戻ってきた。

勿論、戻ってきたと同時に料理を並べている途中でその作業をやめているギルベルトと、椅子から立ち上がって固まっているアントーニヨを見れば驚くわけで。

また何か問題でも起きたのかとでも問いたげな視線を寄越してくるが、ギルベルトにもそんな事が解るわけが無い。

「これ、見てみい」

それからたつぷり十秒以上の間を置いて、突然アントーニヨが携帯を突き出してきた。既に画面は黒くなっていたが、軽く操作してまた画面を明るくさせた後、フランシスと二人で覗き込む。

若干ゆっくりめに文字の羅列を追っていく。最後まで読み終えたところで、ギルベルトは成る程、と納得した。逆にフランシスはへえ、と面白げに声を上げる。声を上げる理由は、その人物がフランシスだということに納得がいく。何しろ関連人物が関連人物だ。その心情は理解出来ないが、フランシスはフランシスなりに何か思う事があるのだろう。

「フェリシアーノちゃんのお兄様がねえ・・・」

「ていうか、これ書いてある限りではフェリシアーノもじゃん」

ギルベルトは驚いたように、しかしいつものように軽く。フランシスは驚きの様子もあるが、それより何か嬉しさの色を滲ませた声色で言った。

ギルベルトは兎も角、今のフランシスの口ぶりはどう考えたって

アントーニョの癪に障る筈だ。ただでさえ、今のアントーニョはぴりぴりしている。

しかし予想外にメールの内容によるショックが大きかったのか、フランスの台詞には全くと言っていいほど反応しなかった。

「何でやああああー!!」

夕刻。フランス宅に、アントーニョの叫び声が木霊した。

## 五（後書き）

四話。

ロヴィーノが頑張るお話でした。

私はくるん兄弟と英の絡みが大好きです。

ついでに言うならラテン系全員（仏含む）と英の絡みはもっと好きです。



## 六

此処最近、アーサーの様子がおかしい。何か考え事をしているかのように暗い表情をしていたのに、翌日にはやけにすっきりした顔をして来るし、かと思えば今度は至って普段と変わらぬ普通の態度。ころころと、表情や雰囲気、体調の様子などが目に見えて変わっていた。

世界会議の最終日。片付けをしている彼の傍でちよっかいを出す。至って普通の反応。いつも通りに怒鳴ってくるばかりだった。

何か知っている様子（というかアーサーのあの様子を不思議そうにもしていないから知っている）と勝手に推測しただけだ（のフラッシュに訊いてみても、俺も知らないよの一点張りで中々情報を掴めそうにも無い）。

他に彼の友人と言えは菊だが、菊も「私も不思議に思っているところでした」といつも通りの表情で言う。本当に知らないのか、それとも知っているのか、もしくは知らないが何となく察しているのかすら解らない。菊は全く掴めない人物だから。或いは彼なら少しくらい解ったのかもしれないが、生憎そういうのが苦手なアルフレッドには全くと言っていいほど読み取れなかった。

「全く、俺に相談も無しだなんて酷いんだぞ」

いつも彼をからかい馬鹿にするが、アルフレッドは彼が嫌いなのではない。寧ろ、彼には絶対に言わない。言えないが、好意を持っている程だ。

その好意の中には憧れや恋慕、兄弟としての愛、育ててくれた事への感謝の気持ちなど、様々なものが入り混じって複雑になり、そしてそのせいでがんじがらめになってしまっているけれど。

「あ！アルフレッド！まだ此処に居たのー？」

イギリスにある空港の一つ。その近くでアルフレッドはずっと立っていた。空港の中に入るでも無く、ただ外でぼーっと。

だって今日は、アーサーを連れてイギリスを回る予定だった。それなのに彼が真っ直ぐ家に帰って仕事をやるものだから、予約していた便にはもう少し時間があるのだ。

その間空港の中に居たって暇なだけだし、どうせなら人に押され押してな場所より広々としていて自由な場所の方が良い。

そう思っただけで空港の外に居たら、突然聞きなれた声に名前を呼ばれた。

「フェリシアーノじゃないか！君もこれから帰りかい？」

ほわほわとした雰囲気、フェリシアーノだった。

かつては敵同士だった彼とこうして居るのは世界が平和になった証拠だ。

「違うよー。本当はそうだったんだけど、ちょっと用事出来ちゃったからさ、予約断りに来たんだあ」

「・・・電話すれば良かったんじゃないかい？」

「あ！そっか！アルフレッド頭いいー！」

何だかひどく間の抜けた会話だが、態とではない。これが彼らの日常だ。まあ、あのアーサーを怖がっていたフェリシアーノがイギリスで用事などどんな大事なものだろうかとも思ったが、流石に仕事関連の事だったら口を出すわけにはいかないのです。ここまでは訊かない。

プライベートなら口を出すが（そこは流石のAKYだ）、国として仕事関連の事で首を突っ込まれると困る事があるのはよく知って

いる。

「あ、ねえアルフレッド」

いつものように他愛無い話を持ちかけようとしたら、フェリシアーノが話題を持っているようだった。別にどうしても話したいわけではなく、どうせなら暇つぶしにと話を持ちかけようとしただけなのだから、態々フェリシアーノの言葉を遮ってまで話す必要は無いだろう。

次の言葉を待っていると、フェリシアーノは本当に嬉しそうに笑って、

「アーサーって本当は怖く無いんだね！」

そう、言った。

\* \* \*

あまりに衝撃的な台詞を聞いて30分。アルフレッドが何でそう思うのかというのを訊ねてみたところ、凡そ纏まりの無い話をしてくれた。

曰く、どうやらフェリシアーノは兄に連れられてアーサーの家を訪れていたらしい。何故兄がそんな行動に出たのかは解らないが、おかげで綺麗な花を摘めたり美味しい紅茶も飲めたり、彼の意外な一面を見れたしで菊のところという一石三鳥だと言っていたが何だか違う気がする。

まあそれは置いておいて、その意外な一面が功を成したのか、彼の事を怖いとは思わなくなったし、明日は仕事が休みだからと明日も彼の家で紅茶を飲める事になったとのこと。

多分、用事とはそれだろう。それで、此処のホテルにもう一泊し、明日また行くという事だったのだろう。

「そつえば、兄ちゃんがめちやくちや写真撮って誰かに送ってたな」

全てを話し終えただろう後、フェリシアーノがぼつりと漏らした。はて、と不思議に思うアルフレッド。まあ、写真を撮るのは百歩譲って解るとしよう。彼の家の庭は本当に綺麗だし、紅茶もいい色をしている。彼が紅茶を飲んでいる時や花について話している時、花の世話をしている時は、ひどく優しい表情をするので、それを撮るのも解る（特にロヴィーノなど彼のその一面を知らない人の場合、物珍しさや好奇心が勝って）。

だが、誰に送っているのか。そもそも送る相手など居ないだろうに。フェリシアーノは外交は良いしかなり貿易もしている為それくらい居るだろうが、その兄のロヴィーノはあまり居ない筈だ。居てもアントーニョや菊、フェリシアーノくらいだろう。

アントーニョだろうか。いやしかし、アントーニョはアーサーを嫌っていたのだから、流石にロヴィーノもそんな馬鹿な真似はしないだろう。だったら、菊だろうか。有り得ない事も無いが、菊とロヴィーノの関係はそこまで深くない為可能性は低い。

全く、解らない。

「あ、アルフレッドも明日一緒にアーサーの家行かない？アーサー喜ぶよ」

突然のフェリシアーノからの誘い。考えに浸っていたからか、す

ぐには反応できなかった。

反射的に行くんだぞ、と言おうとして、明日仕事が終わっている事を思い出す。行きたいのは山々ではあるが、今日はよししておく事にした。

「俺は明日仕事があるから遠慮しとくんだぞ！」

彼の不味いスコーンも偶に欲しくなるものらしく、今は何だか彼のスコーンを食べたくて仕方が無い。けれど、仕事を放置してれば余計に忙しくなってしまうから放置するわけにはいかない。

フェリシアーノは「そっか」と残念そうに言って、ホテルがある方向に帰っていった。

折角此処まで来たのだから、もう中に入って直接断ればいいのにも思っただが、黙っておいた。

\* \* \*

「昨日から眉毛眉毛眉毛眉毛……！！何なんもう！！」

叫び声にも近いその声を聞いて、目を覚ました。先程まで夢の中だったせいかわ、意識がはっきりしない。が、叫んだ人物とその人物が叫んだ理由は何となく理解できる。

「……アントーニヨ、朝から煩え……」

少し離れたところでうつ伏せになって寝ていたギルベルトから声

が上がる。フランシスは少しだけ乱れている事が自分でも感じ取れる髪の毛を手で直して、アントーニヨを見る。

そこには予想はしていたが、携帯片手にいきり立っているアントーニヨが居た。

多分また例の子分から写真付メールが送られてきたのだろう。昨日から何度その事で苛々し叫んでいる事か。全く、人の家で叫ぶのは止めて欲しいものだ。近所迷惑だと怒られるのは家主のフランシスのなのだから。

しかもその内容で同意を求められても、フランシスからしてみれば多少なりとも嬉しいものなのだから困る。

「せやかて見てみい！またロヴィイから来とんのやで！？あの眉毛付メール！」

眉毛付というと変な誤解を招かれそうだが、まあ、何が言いたいのかは解る。つまりロヴィイノからアーサーの家の中、もしくは紅茶などを撮った写真が添付されたメールを送られてきているわけだ。昨日初めに来たメールは、アーサーの家に居るといふ嫌がらせとも言えるメールの始まりだった。

アーサーの事が嫌い且つ少し前のいざこざで、彼の事で苛々しているアントーニヨにとってはひとたまりもないだろう。フランシスにとつてはその苛々もお門違いというもので、正直なところアントーニヨには全く以って同意出来ないのだが。

アントーニヨからしてみれば、二日間も無視され続けた拳句嫌いな奴に関連する写真を送られたのだから苛々するのも仕方無いのであるうが。

そういえば、と顔を上げて時計を見る。既に10時を回っていた。昨日遅くまで飲んでいたのが悪かったらしい。幾ら休みとはいえ、これ以上寝ているわけにもいくまい。

「今から昼食兼ねた朝食作るけど、ギルもトーニヨも食べてくでしよ？」

「俺の話は無視かいな!？」

「食べてくでしよ？」

「食うに決まっとするやる！」

全く面倒臭い愚痴に付き合うより、まずは腹ごしらえだ。アントーニヨの話は放っておけば何時間でも続くから。ギルベルも「んー・・・」と寝惚けているのか、食べるという肯定の意なのか解らない声を発したので、勝手に食べるのだと判断してキッチンに姿を消した。

\* \* \*

フランススが全ての料理を作り終わると、アントーニヨは携帯片手に固まって、ギルベルトはその携帯を横から覗き込んでいた。

大方またロヴィーノから新たなメールが届いたというだけだろうが、何をそんな固まる必要があるのか。ギルベルトはギルベルトで小さくへえ、と感心したように声を漏らした。

口を開いて何事かと訊ねようとすると、ギルベルトがこちらに気付いて口許に人差し指を当てて「静かに」のポーズを取り、手招きをする。料理をテーブルに置いてアントーニヨの後ろからメールを覗き込むと、成る程と納得出来る映像がそこには映っていた。

フランススやギルベルトは彼がそういう一面を持つのも（ギルベルトは一部だけだろうが）知っている為、納得したり感心したりするだけに留まるが、彼のその一面を全く知らないアントーニヨはそ

れは驚くだろう。

何しろ、あの過去に大英帝国と恐れられ、鬼のような形相で冷笑を浮かべアントーニヨを頂点から蹴落としたアーサーが。あのアーサーがだ。ひどく優しく、慈愛に満ちた微笑みを浮かべて花を愛でているのだから。

それを見て納得した後、フランスはギルベルトを呼んだ。

「何だよ？」

アントーニヨが見えないところで、アントーニヨに聞こえない声で、ギルベルトはフランスに訊ねた。流石に意図は解っているらしい。

「今回の件、アーサーがアントーニヨに何したかが解るまで、口出ししないこと。・・・いい？」

小声のギルベルトに、同じような声量で返す。何気に御節介なギルベルトには、釘をさしておかなければ。でないと、ギルベルトはアントーニヨやアーサーと関わって何とかしようとするだろう。それだけは、避けたい。

「・・・？ああ、それは構わねえけど、何したか解るまで、ってどういう事だよ？」

「解らないままに変な事して、事態が悪化したら駄目だから」「じゃあ、何したのかアーサーに訊くのは？」

ギルベルトは物分りが良い。だから何故かと訊かれて説明すれば、それとなく自分流に噛み砕いて理解してくれるし、了解してくれる。けれど、何かと干渉したがるから、何とか彼らの事について関わろうとする。



「それも駄目。あいつが勝手に話し出すんなら問題無いけど、こっちから訊くのは、駄目」

「……………めんどくせえ」

そうは言うが、その通りにしてくれらるだろう。弟のルートヴィッヒと同じで、やけに生真面目で約束は破らない主義だから。本当にルートヴィッヒの兄かと思う事は多々あるが、やはりこういうところは兄弟らしい。

ギルベルトの最後の台詞を確認と了承の言葉ととって、フランシスはアントーニヨの居る場所に戻った。ギルベルトも後に続く。

アントーニヨは未だに携帯の画面を見たまま固まっていた。その頭では何か考え事でもしているのか、それともそれさえフリーズしているのか。

「……………どうしたの、トーニヨ？」

少しだけ、意地悪を試してみる。何故彼が固まったのかなんて解りきっている。驚いているのと 多分、少しだけ、見惚れているのだろう。アーサーはこういう表情をしていると、人を惹き付けるから。いつもこんな表情をしていればいいのと思うけれど。

アントーニヨは慌てたように折りたたみ式のそれをパタンと閉じた。

「何もあらへんよ！飯食おか！」

慌てたようにたった今料理を並べたテーブルへ向かうアントーニヨ。ギルベルトもフランシスもそれに倣い同じようにテーブルへ向かう。

取り繕った笑顔で取り留めの無い話をするアントーニヨを見て、

フランスは静かに笑みを浮かべた。

## 六（後書き）

毎日更新が崩れた…！  
まあいい…。諦めよう…。

次くらいからやっとほんのり進展する…かも？

## 七

アントーニヨは目の前の光景に絶句した。

我が目を疑う光景だった。すぐ近くにある茶髪に、少し遠くに見える、目の前のそれよりも色素が薄く明るい茶髪。それは良い、良いのだ。

しかし。

「……来る時は連絡入れやがれコノヤロー」

一瞬見えた光景にフリーズしていると子分から声が掛かる。

今日はあまりに長い間会っていなかったため、我慢出来なくなつてロヴィーノの家にやってきたのだ。アポイントメントも入れずやってきたのでそれは驚かれるだろうが、多分驚きの面ではアントーニヨの方が大きい。

幾らアポイントメントをいれていないからといって、これはあまりにタイミングが悪すぎでは無かるうか。ロヴィーノが此処数週間で何度もアントーニヨにしてきた行為のおかげで、計算なのではないかと疑ってしまう程に。

「な、なあロヴィーノ？」

アントーニヨは啞然とした表情のまま、ロヴィーノに話しかける。

「何だよ」

まだ機嫌は直って無いのか、ぶっきらぼうでつつけんどんな返事。しかしそれを気にする余裕は無い。

「今……カークランド、おらへんかった？」

そう、一瞬、たった一瞬ではあるが、少しボサボサ気味な褪せた金髪が見えたのだ。

ロヴィーノは1ヶ月程前からやけにアーサーの家や庭、アーサーの淹れた紅茶や、彼自身、彼と映ったロヴィーノやフェリシアーノの写真を撮ってはアントーニョに送りつけてきていた。

その意図は全く解らないが、推測するに原因は解らないがその1ヶ月前の会議からかなりアントーニョに対して冷たい態度をとっていたのでその延長線上のもので、嫌がらせか何かだろう。何がきっかけでアーサーをあんなにも怖がっていたロヴィーノがあそこまで彼と仲良くなったのかは不明であるが。

それはもううんざりとしていたが、最近は回数も減ったからと安心していたのに、まさかこんなところで直接本人に会おうとは。

「……………」

ロヴィーノは無然としていてそれに答えようとはしなかった。

「ロヴィーノ？どうし……………」

ロヴィーノが戻ってくるのが遅かったからだろう。アーサーがキッチンがある筈の場所からひよっこりと顔を出して玄関　つまりロヴィーノとアントーニョが居る此処を見た。

しかしそこにアントーニョの姿をしつかりと認めたのだろう。「どうした」と紡ごうとしたその唇は途中で働く事を忘れてしまった。

「アーサーどうしたのー？」

果てにアーサーが止まったのを見てフェリシアーノまで玄関を覗

く始末。

「あーアントーニヨ兄ちゃん久しぶりい〜！」

無邪気な笑顔で手を振ってくるのはいいが、正直この場の空気には全くそぐわない。同じくしてKYと揶揄されるアントーニヨではあるが、流石にそれくらいは解った。

アントーニヨは直接見た事など無い和やかで幸せそうな表情をしていたアーサーは、しかしそれを無表情へと変えた。

「カリエドが居るなら、俺は帰る」

このまま踵を返して帰ろうか悩んでいたところへ、アーサーの声が届いた。成る程相手を嫌っているのはアントーニヨだけではないのだから至極当然の結果である。

アントーニヨにしてみても有難い事ではあるが、彼が帰ると言った途端にシヨックを受けたような顔になったフェリシアーノとロヴィーノの表情が気になって、安易に何かを言う事は出来なかった。

それにも気付かず玄関に向かって歩き出したアーサーの腕を、フェリシアーノとロヴィーノの二人が一緒になって掴んだ。

「俺アーサーの紅茶飲みたいよお〜」

「か、勝手に帰るんじゃないよコノヤロー！」

どうやら二人は、相当アーサーに懐いてしまっているらしい。

確かにアーサーの紅茶は美味しいと評判だし、昔の彼でない事も知っているけれど。それにしても、何か彼らを手懐けるような事でもしたのではないかと疑いたくなるくらいの懐きようである。

「……………俺が良かったとして、カリエドは嫌がるだろ」

戸惑っている様子のアーサー。引き止める二人に一体何を見出しているのか、その表情は何かを思い出したかのように切なげに眉が寄せられている。

アントーニヨは、相手が誰であれああいう表情に弱かった。何かに耐えるように寄せられた眉や、泣き顔などを見ると、とことん甘やかして慰めてどうにかして元気付けたいと思ってしまう。それがアーサー相手だったとしても、昔に植え付けられたその性はどうにも直せない。

アーサーもアーサーで、帰るなとせがむ様子や泣き顔に弱いらしい。多分それは、今は世界に冠する国の過去を思っているのだろう。そんな思考は、ロヴィーノの睨みつけてくるような視線によって中断された。

「あいつの事は気にする必要ねえぞ」

俺に向けていた鋭い視線を、緩くしてからアーサーに戻すロヴィーノ。未だにアントーニヨに対して怒っているのかもしれない。そうだとすると、此処から追い出されるのはもしかしたら、アーサーではなくアントーニヨである可能性も否定は出来ない。

まあそうなれば潔く帰る　わけが無い。アントーニヨはアーサーが嫌いだし、それにロヴィーノに会いに来たのだから、そうそう簡単に帰ってたまるものか。しかも、アーサーの為なんかに。

だが、もしアントーニヨが此処に居られるのだとすれば、アーサーが此処に居る事は何とか妥協しようとも思っている。

「・・・ロヴィー達が居って欲しい言つとんねや、居らんと容赦せえへんぞ」

溜息を吐きながら、軽く脅しとも言える台詞。

そうしなければ、彼は本当に帰ってしまいかねない。そうすると可愛い子分とその弟が残念がる。それだけは、アントーニヨとしても避けたかった。

今日は仕方ない。アポイントメントをとらなかつたのだから。

今日だけ、今日だけだ。そう言い聞かせて、アントーニヨは驚いた様子のアーサーが居る方へと近付いた。

「ヴェー！じゃあ、アーサー居られるよねっ？」

嬉しさいっぱいので声でアーサーに訊ねるフェリシアーノ。この子がこんなに喜ぶのなら、嫌いな相手が同じ空間に居たとしても許せる。我慢できる。

ロヴィーノも心無し嬉しそうにしている。

「、いい、のか？」

困惑しているように訊ねてくる彼に、返事をしない事で肯定の意を表した。

\* \* \*

思ったより、苛々する事は無かつた。ロヴィーノはまだアントーニヨに対する理由の解らぬ怒りが治まっていないようで、相変わらずアントーニヨには殆ど話しかけずアーサーばかりだった。それでも苛々しなかつたのは、アーサーの対応が一番の要因だと言えるだろう。



アーサーは昔や、会議中、アルフレッドやフランシスと話している時とは全く違って、随分穏やかで落ち着いた返答を返すし、態度もそんな感じだ。

フェリシアーノはアーサーに振った話題と同じものをアントーニヨに振ったりと、相変わらず懐いた相手には分け隔て無い。

「そうそう、それでな………」

アーサーの方はアントーニヨが居ても案外普通で、多分ロヴィーノやフェリシアーノと居る時にはデフォルトとなったのだろう態度で接している。

それにしても、最近随分この三人は仲良くなった。結構な頻度で彼のところへ行っているというメールがロヴィーノから届くし、アーサーの話し相手は専らこの二人なのではないだろうか。

気付けばアントーニヨは、アーサーの何処かしら（顔だったり頭部だったり手だったり）を見ながら考えに浸っていた。

「……つと、紅茶がなくなったから新しいの淹れてくる。お前らはまだいいか？」

アーサーの手がティーカップに触れて、そこで思い出したように言う。アントーニヨの目の前にも一応アーサーが淹れた紅茶があるが、全く手をつけておらずすっかり冷えてしまっていた。

ロヴィーノやフェリシアーノがそれぞれのティーカップを差し出す。

「………カリエドは、要らないか？」

突然声を掛けられ、驚いて勢いよく顔を上げる。アーサーはアントーニヨの手元にあるまだ紅茶が並々と残っているティーカップを

見ていた。

一瞬悩んで、どうせ淹れてもらったって飲まないのだから要らないだろうと断ろうとすれば、横からロヴィーノがその紅茶が残ったティーカップに腕を伸ばし、中身を零さないようにそれをアーサーに差し出した。

「ロヴィイ、俺要らへんで？また冷ましてまっつのがオチやもん、勿体無いやろ？」

驚きつつも冷静にそういうと、ロヴィーノは無言でアントーニヨを睨んでから言葉を返してきた。

「うるせえ。折角美味しい紅茶がただで飲めるんだから一口くらい飲みやがれ」

いつも傍若無人ではあるが、今日はいつも以上に強引だ。一体どうしたというのか。

だが、愛しい子分に飲めと言われたからには飲もう。そう考えて戸惑っているアーサーに「ほんなら淹れてえな」と頼んだ。

アーサーがキッチンに姿を消して、フェリシアーノがその後を追う。お菓子を持ってくるだの何だの言っていたから、多分アーサーと仲良く喋りながら何か甘いお菓子でも持つてくるのだろう。

二人が居なくなつたこの空間に、沈黙が落ちる。数分という沈黙が続く時間が流れた時、アントーニヨが口を開いた。

「………なあ、ロヴィイ？何怒つとるん？」

沈黙に耐えられなくなった。それもあるが、何よりやはり早く仲直りして、いつも通りに下らない話をしてトマト齧つてご飯を食べに行くって、そんな事を、したいのだ。

ロヴィーノは無視をするというより、何か考えるような間を数秒間置いた後、口を開いた。

「冗談じゃ、ねえから」

とても短い返答で、アントーニヨには何の事なのか全く解らなかつた。

今此处で冗談という単語が出てきた事も、それに対する否定をされた事も、ロヴィーノが今、顔を逸らしている理由も。

「・・・？何がや・・・？」

ロヴィーノの言動、行動、どちらも全く理解出来ない。だから、聞き返した。

「あいつは、あんなにお前が・・・」

ロヴィーノの顔はよく見えなかったが、前髪の隙間から僅かながら見えたそれは、ひどく切なげに見えた。

続きを言うか言うまいか迷っているような仕種で視線を彷徨わせて、漸くその視線をアントーニヨに向け口を開いた時。

「お待たせ」

キッチンに行っていたフェリシアーノが帰ってきた。勿論その後ろにはアーサーが居て、そういえば此处はフェリシアーノとロヴィーノの家である筈なのに、当然のようにアーサーが率先して紅茶を淹れに行っている事に少し疑問を持つ。

それほどまでにこの家に入りにしているのかとか、その辺りを知りたいところではあったがまあ大した問題でも無いので、渡された

紅茶を素直に受け取った。

幾ら嫌いな相手であろうと紅茶自身に罪は無いし、折角の厚意なのだから受け取るべきだ。

まああの美食家であるフェリシアーノが飲みたいと言い、同じく美食家であるロヴィーノが美味しいというのだから本当に美味しいのであろうが、まあ彼らは紅茶よりコーヒーを嗜むため紅茶に関しては大して舌も肥えていない筈だ。だがそれはアントーニヨも同じである。アントーニヨも美味しいと言えるレベルには美味しいのだから。

そうして少しの期待を持って湯気の立ち込める紅茶を口元へ運ぶ。不意に鼻腔をくすぐった香りがあまりにも美味しそうなもので、それがまだ熱いものだという事も忘れて口をつける。

「あつつうつ！」

何ともお約束な事である。

慌ててティーカップを離す。その拍子に少量ではあるが紅茶が零れ、それが見事にティーカップの柄を握る指にかかった。

「う、わっ……！」

勿論、このたった数秒で冷める筈も無い。舌どころか指も火傷してしまった。まさに泣きつ面に蜂である。

「だ、大丈夫、アントーニヨ兄ちゃん!？」

「ば、馬鹿! 気をつけて飲めよ!」

フェリシアーノとロヴィーノの焦ったような声が聞こえる。舌が痛くて答える事が出来ずに居ると、椅子が動く音がした。そちらを若干涙目になりつつ見ると、アーサーが席を立った音だった。

「フェリシアーノ、救急箱出してくれ。それからまたキッチン借りるぞ」

「え、あ、うん！」

軽くパニックになっているフェリシアーノに指示をして、自らはキッチンへ向かうアーサー。こういう事に慣れていているようだった。

またその場に残されたロヴィーノとアントーニョ。ロヴィーノはやる事が無いと落ち着かないのか、アントーニョの手の火傷を見ながらそわそわしている。

一分もしないうちにフェリシアーノが戻ってきて、それから数秒でアーサーもキッチンから出てきた。その手には透明な袋に氷が入ったものと、同じように氷水が入ったコップだった。勿論、小さな火傷である為袋に入っているのは大した量ではないが。

「まずはこれで冷やせ。舌はどうしようもねえから取り敢えずこの水でも飲んでろ」

言われた通りに指を冷やし、ひりひりする舌をその場凌ぎでも落ち着かせる為に水を口に含む。

数分もすれば舌は兎も角指は落ち着いてきてほ、と息をつく。勿論舌も水を飲まないよりは大分マシだろうが延々と冷やしていられるわけではないので指ほどではない。

息を吐いた事で落ち着いた事を悟ったのであろう。アーサーが近づいてきた。

「……大丈夫そうだな。一応軽く包帯巻いておくから大人しくしてろよ」

言うや否やフェリシアーノが持ってきて置きっぱなしだった救急

箱に手を伸ばすアーサー。

いつも会議室でフランススを殴ったりしている筈のその手はひどく優しくアントーニヨの手を取った。男にしては随分華奢な手だ。細い指と華奢なわりに少しの骨ばりを見せる手の甲のバランスは非常に良い。これは何も手に限った事ではないが、肌も白く綺麗な手である。

手から視線を外してアーサーの顔を見る。ロヴィーノの写真にあつたあの優しく綺麗な笑みはなく、ただ無表情だった。だがそれでも十分に人を惹き付ける綺麗な顔をしている。睫は長いし唇も淡い桃色で艶っぽい。

と、そこまで考えて慌てて目を逸らした。随分馬鹿な事を考えていると自覚して、顔が赤くなつていくのが解った。

どうもあの写真を送られてから、アントーニヨはアーサーに対する接し方が解らなくなつてきている。勿論思い出さなければいい話ではあるが、彼を見るとどうしても脳裏にあの笑顔がちらついて仕方が無いのだ。

「……………よし」

悶々と考えていると、アーサーが声を上げて立ち上がった。

手元を見てみると実に小綺麗に仕上げられている。器用なものだ。慣れている、というのもあるのだろうが。

「舌火傷してるんじゃない、これ以上飲めないだろ」

そのまま元の席に戻るのかと思いきや、先程アントーニヨが零して尚残る紅茶の入るティーカップに手を伸ばすアーサー。その手にはいつ出したのかハンカチが握られている。そのハンカチで零れた紅茶を拭く。

ハンカチには綺麗な刺繍が施してあつて、随分綺麗だと思った。

多分あれは薔薇だろう。遠目ではあるが、形と色合いからそれは解った。

それにしても、本当に綺麗に細かく刺繍が施してある。多分、一級品だろう。彼自身がよく刺繍しているところは見掛けるが、流石にあんなにも綺麗なものが彼の手によるものという事は無いだろう。何せ趣味の域だと聞く。

そんな事に思考を奪われアーサーの問いというか、確認に答えずに居ると、彼はおもむろに紅茶で汚れてしまったハンカチをしまつてアントーニヨの分の紅茶を持っていつてしまおうとした。

「ちょ、飲む！飲むで！折角淹れたんに、勿体無いやろ！」

慌ててそれを止める。彼は少し驚いたように、そして訝しげにアントーニヨの様子を伺った。

「ちょっとくらい痛うても俺我慢するで、置いといたって！」

何をこんなに必死になっているのか解らないが、兎に角紅茶をちゃんと飲んでみたかった。

あの香りが原因なのか。まあそれもあるだろうが、他にも理由があるかもしれない。無いかもしれない。アントーニヨ自身、よく解らなかった。

「……………解った。本当に痛くても知らねえかな」

呆れたように、けれど少し嬉しそうにそう言って、アーサーは一度手に持ったそれをまた置いた。

アーサーが戻るのを待って紅茶を口に含む。数分置いたおかげか、随分飲みやすい温度だ。ただこれは、多分もう少し高温の方が更に美味しいのだろうなと、紅茶に関する知識の無いアントーニヨで

もそれくらいは漠然と解った。

紅茶の温度を感じて火傷してしまった舌がひりひりと痛む。けれど、それを我慢して味わいたいと思う程、それは美味しかった。少し温くなったのにも関わらず美味しい。これはフェリシアーノと、あの天邪鬼なロヴィーノまでもが美味しいと褒め称えたのが解る気がした。

「……だから、知らないって言っただろ」

予想を上回るそれに思わず黙りこくって、表情も無くして紅茶を少しずつ口に含んでは嚙下しを繰り返していると、何を誤解したのかアーサーは渋い顔で不平を漏らした。

「火傷した舌で紅茶飲んだって、本当の美味さの半分も味わえねっつの」

まあ確かにひりひりしてそれを味わう事に集中はしきれなかったが、それでも十分に美味しかった。それでいいのではないかと思うが、こよなく紅茶を愛すアーサーはそうは思わなかったらしい。

昔はあんなにも野蠻で紅茶や花など無縁だったというのに、まったく人というのは解らない。いや、この場合は国であるから尚更にそれこそ千年以上も生きていれば、嗜好などは変わってくるに決まっている。戦争の時代を終えこの平和な時代になれば余計だ。

「ほんなら、火傷直つたらまた淹れてくれればええやろ」

不意に口にしてしまったその台詞に、しまったと慌てて口に手を当てる。

嫌いな相手にそんな事言われてしまったては彼の機嫌は急降下するだろう。折角平和にフェリシアーノやロヴィーノ達と過ごしている



というのに。」

「いいのか・・・？」

だと思っただのに、そのような声が聞こえてきた。

恐る恐るアーサーの表情を伺う。彼は、別に怒っては居なかった。寧ろ嬉しそうにはにかんでいるように見えた。が、それも一瞬の事だった。すぐに元の無表情に戻ってしまった。もしかして見間違いだっただのかもしれないと思ひ直す。

「あ、いや、その・・・。お前が飲みたいてんなら、仕方無いから淹れてやる」

何とも上から目線な物言いだっただが、飲みたいのは本当の事だし頷いておく。

それがフランスの言うツンデレというものなのかどうかはよく解らないが、最初の焦りようから何かの誤魔化しだろう。と、思っておく。

全部飲み終えたのかティーカップを受け皿に戻してアーサーは立ち上がる。

「ヴェー・・・もう帰るの、アーサー？」

「ああ、今日はこれから用事があるんだ。そろそろ出ないと間に合わねえ。悪いが後片付けしといてくれ」

「了解であります！」

フェリシアーノと普通にやり取りをしている様子を眺める。玄関に見送りに行くフェリシアーノとロヴィーノに、二人が行くならばとアントーニヨも腰を上げる。

玄関が見えるところに移動した時にはアーサーは玄関から出る直

前で、フェリシアーノに手を振られて見せた控えめな笑顔はどこか切なげに見えた。

「また来てね、アーサー！」

「……………ああ、また来る」

声を掛けられて驚いたように、そして躊躇ったように少しの間を空けた後苦笑のような、自分に対する嘲笑のような微妙な笑みを浮かべて答えた後、この家を去った。

その笑みは何故か、フェリシアーノ達兄弟ではなくアントーニヨに向けられたようなものであるような気がした。気がしたただけかもしれないが、何となく、彼がこちらを向いたような気がしたのだ。

もしかして　と、ある一つの可能性について考えて有り得ないと首を振る。

しかしそれが無いとしてもやはり疑問に思うところや、腑に落ちないところがあった。だって彼は今日、

「なあ、ロヴィ？」

「んだよ」

「何であいつ、嫌いな俺にあないに優しくかったんやろ？」

少し前に嫌いだと公言していたアントーニヨに対して、ひどく優しくかった。幾らお人好しで世話焼きだと言われるアントーニヨでも、あそこまで優しく接する事など出来そうもない。紅茶を淹れてくれるのはまあついでだとして、何故嫌いな奴の手当てをしたりまた紅茶を淹れてくれと改めて頼んで了承したりするのか。

全く、相変わらず彼の行動は理解不能だ。

「だから……………っ！！……………はあ、もういい」

ロヴィーノは何か煮え切らない態度を取った後、一つ大きな溜息をついて言葉の続きを捨てた。

「えー！何々、ロヴィ答え知ってん！？教えたってや〜！」

先程の言い方は、答えを知っている時のものだ。教えてくれとせがめば教えてくれる時もあるし、そうでない時もある。ロヴィーノは気難しく、そして気紛れだから。

「いいつつってんだろ。自分で気付く馬鹿」

今回は教えない方を選択したらしい。これ以上せがんだって教えてくれる確率は皆無だと経験上知っている。それでも諦めきれず詰め寄ると、「こつちくんじゃねえ！」と顔面にストレートを入れた。

もうこれ以上言っても無理そうなので仕方無く諦める。

「……………自分で気付かねえと、意味ねえんだよ」

ぼそりとロヴィーノがそう言った事は、アントーニョの耳には届かなかった。

二人の傍では、全く理解出来て居ないのだろうフェリシアーノが、不思議そうに首を傾げていた。

## 七（後書き）

お久しぶりで御座います。何だか大分間を空けてしまいましたが呪いの解き方、続きで御座います。

やっと進展し始めた二人。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0523w/>

---

呪いの解き方

2011年10月9日13時14分発行